

一つの村から見えるもの

島田周平（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

一つの村を見て何が言えるのかという批判があることを知りながら、私はここ25年間ほどナイジェリアとザンビアで、それぞれ一つの農村を10年以上調査してきた。農業関連のマクロ・データが信頼できないことを抗弁の理由としてあげることもできる。しかし私には、同時代を生きているアフリカの農民たちが何を考えどのように行動しているのかを少しでもよく知りたいというより積極的な思いがあった。それには長い期間、一つの村でその人々の生き方の変化を見る必要があると私には思えた。

私とナイジェリアのイグビラ人とのつきあいは1970年代末に始まった。当時のナイジェリアはオイル・ブームのまただ中であった。通貨ナイラは旧宗主国イギリスのポンドよりは安くなっていたものの、ドルより高い水準（1ナイラ＝1.55ドル）を維持し、私が所属したイバダン大学上級講師の年収は当時の私のそれと同水準（6000ナイラ：約200万円）であった。ラゴス - イバダン間に片側2車線の高速道路が完成し、町では高層ビルが建設中であった。

イグビラ人の村、E村とのつきあいも20年あまりになる。「オイル・ブームの恩恵を受けているのは軍人と町に住む人たちだけだ」と批判するE村の老人たちも、村の飲み屋でテレビを見ながら瓶ビールを飲んでいた。近くで進む製鉄所や村を横切る高速道路の建設工事でE村にも大量のナイラ紙幣が舞い込んでいた。若者たちは、町に出て農業以外の職に就きたいと判を押したように言っていた。その夢の実現のために、手間のかかるヤムイモ栽培から手を引き、キャッサバ栽培の比重を増やして求職運動のための時間を作っていた。世界銀行のレポートはこの頃のナイジェリアの1人当たりGNPは約1000ドル（1980年）と報告していた。

1980年代末以降、人々はオイル・ドゥーム（オイル不況）の時代がやってきたと聞かされた。町に職はなく若者たちが出稼ぎに行こうにも行き先がなかった。私の調査補助をしていた高等師範卒の青年2人も、家で農業をやるしか手だてがなくなっていた。村の中学校で時間講師をすることもあったが、生活の足しになる収入は得られない。やがて彼らは、かつて手間がかかると敬遠気味であったヤムイモ栽培に戻り始めた。世界銀行のレポートは、2004年のナイジェリアの1人当たりGNIを400ドル台と報告している。

一つの村を見ていても、そこに住む村人の、より広い地域や国家との関係性さらには国際的なつながりに心すれば、自然とわれわれの視点もその村を超えていくことになるのではないだろうか。